2015.3.1　四旬節第二主日

山上の変容

マルコによる福音 9:2-10

（そのとき、）イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。ペトロが口をはさんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。

　一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

説教

毎年、四旬節になるときょうの聖書箇所「主の変容」を読んでいます。

教会の伝統では、山の上でのイエスの栄光の姿は、イエスが受難と死をとおって受けることになる栄光の姿が前もって弟子たちに現されたのだと考えられてきました。

イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。9:2-3

マルコの福音書はリアルに、つまり「この世のどんなさらし職人の腕」とい

う具体的な比喩でイエスの栄光の姿を伝えています。きょうの福音はすごいなあ、とただただ感心して畏れ入っていればいいのではないか、とわたしは思っています。

彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

イエスの変容した姿を見た弟子たちが、論じ合ったように、福音を聴くわたしたちも「イエスの受難・死・復活にあずかること」とはどういうことかと論じ合うわけで、古来からいろいろな解釈があります。

あなたはイエスに似た人を見たことがありますか？

いぜんこう質問されたことがあり、ないよなあ、と心の中でつぶやいていたら、質問者はわたしは見たことがあるといって、ある人の名前をあげていました（有名な人ではなく、どちらかというと無名な人）この質問はわたしの中でひっかかっていて、いつかイエスに似た人に会えるかもしれないなあ、と楽しみにしています。

「イエスの受難・死・復活にあずかること」とはイエスに似た者になるということだという解釈があります。イエスのような人になる、つまり「救い」はそこになるといったら、先走りすぎかもしれませんが、ゴールをそこ（イエスに似た者）に置くという意味を含んでいるようです。さきほど引用した10節で弟子たちが論じ合った内容は具体的に福音書には記されていませんが、手紙の中には結論が記録されています。

わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。フィリピ3:20-21

愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。ヨハ第一 3:2

神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。ロマ 8:29-30

弟子は師にまさるものではない。しかし、だれでも、十分に修行を積めば、その師のようになれる。ルカ 6:40（これは喩え話の中でのイエスのことば）

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。ガラ 2:20 （弟子とされたものの一類型か？）

初めのころのキリスト信仰に、イエスの再臨のときにイエスに似た栄光の姿に変えられる、というおもいが強くあったことがうかがえます。

わたしは初期の信徒のような願望はありませんが、救われたいと強く願っていますし、その一方で救われていると確信もしっかりと持っています。毎日の生活の中ではこれじゃあ救いはないじゃないか、とか、どうしてこんなひどい目にあうんだということはありますが、のん気なのか、たいてい寝る頃になると穏やかな気分になります。

先日、知的障害のある男性といっしょにスーパー銭湯にいきました。彼は悪態をつく癖をもっているので短気なわたしは彼と会話をしていると力チンとくることもしばしばあります。銭湯にいくのは初めてだったので少し不安もありましたが、楽しい時間を彼とすごすことができました。風呂好きという性格も味方しているのでしょうが、入浴中の彼はまったくの幸せ状態にいて、まわりの人もつられて笑顔になる、幸せにまきこんでいきました。幸せな人

をみるとやっかんでしまうというのが不幸な人間の本性のひとつでもありますが、彼の幸せはまわりも幸せにする力がありました。ところで彼はまったくイエスに似ていません。でも、わたしが気づいていないだけで彼のような人こそがイエスに似た人なのかもしれません。

信仰をがんばってイエスに似た者になるってかんがえでは足りない、とわたしは思っています。また「**御子の姿に似たものにしよう**」を表面的にとらまえて悲観することも楽観することもおかしなことだと思っています。イエスの栄光に輝く姿を見た三人の弟子たちは畏れ入って腰を抜かして、あらぬことを口走った、しかし歴史的にはこの弟子たちがキリスト教の礎を築きました。十字架のキリストを裏切って逃げ去った弟子たちが、どういうわけか力を得て信仰を力強く継続しました。

「これはわたしの愛する子。これに聞け。」

彼ら三人の弟子たちの聞いたこのみことばが、わたしたち一人ひとりの耳にも響きますように。